

序

このたび、試薬の性質と利用法をガイドする書籍「ライフサイエンス試薬活用ハンドブック」を発行することになった。本書はバイオ研究試薬の性質や保存・調製法、取り扱いの注意や生理的意義、さらには関連物質などについて記した、辞典、解説書、そしてカタログ機能を併せもつ書籍で、「生物学的作用および用途別試薬」、「無機化合物」、「有機化合物」の3部から構成されている。1部は本書のメインで、ホルモンや抗生物質など、試薬を24の章に分けて配置し、2部と3部ではより多様な目的に使われる試薬をとりあげた。試薬によっては誘導体の形をとるものがあったり、逆にさまざまな理由によって単体として販売されていないものもあり、どのようなスタイルで各試薬を掲載するかは編集にあたり最も悩んだ点であったが、本書は市販されているものの中で比較的良好によく使われる形態の物質を各試薬の代表としてとりあげ、それを中心に解説するという形式をとった。このような機動性と利便性に加え、別名をもつ試薬は別名からでも見たいページにたどり着けるようにもした。本書で扱う試薬は主に生化学、分子生物学、細胞生物学といった基礎生物学実験にかかわる物質であるが、その中でも特に使用頻度の高い厳選約700品目が掲載されている。

あらかじめ試薬の性質や入手法をチェックしてその安定性や取り扱いのポイントをおさえ、作用機構や生理機能を熟知しておくことは、実験時間の短縮のみならず、実験原理の理解向上と実験で発生するトラブルの軽減につながると考えられるが、本書はそれを補助する最良の一冊になると確信している。本書がベンチサイドにあって実験ガイドとしての役割を果たすことができれば、作り手としてこれに勝るよろこびはない。最後に、原稿執筆にあたられた先生方と、困難だった本書の企画・作成を担当された蜂須賀修司、深川正悟の両氏に、この場を借りて心よりお礼申し上げます。

2009年 1月

楠の緑揺らす小寒の西千葉キャンパスにて
田村隆明